



『山の衰えは則ち国の衰えなり』

通年コース第一・二回開催報告「植林・伐木造材」

わが国の森林率は68・5%でこれは一定の面積と人口を持つ国の中で、フィンランド(72・9%)、スウェーデン(68・7%)について3番目です。アマゾン熱帯雨林を擁するブラジルや、木材輸出大国のカナダ、アメリカ、ロシアをしのぐ率で、世界の陸地の森林率がおよそ31%ですので、もちろんそれを大きく上回っています。アジアの平均は、中国やインドをはじめ人口の密集して

いる国や地域が多いので、わずかに19%です。西ヨーロッパは11世紀頃から、狼や魔女の棲む森の大量開墾時代に入り、それ以降の産業革命を経て、森林の大部分を失いました。その苦い経験から、森林をとても大事にしていますし、中国も一時10%ほどであった森林率を、割箸の禁輸や国を挙げての植林で、ここ10数年の間にアジア平均の19%程度まで回復させています。

わが国でもその歴史のなかで、度重なる遷都や、戦国時代から江戸時代にかけての寺院や城郭の建築ラッシュや大火、また直近では第二次世界大戦中の軍事物資や戦後の復興資材として、過剰な伐採がなされたときもありました。この戦中、戦後の過剰伐採時代は現在の需要に匹敵する年間1億立方メートル以上という膨大な量の木材を国内で生産していたようです。しかし、これら時々の大伐採の後には、政策や事業として、あるいは江戸時代では豪商が私財

を投げ打ち森林造成を行った例なども多く見受けられます。江戸時代初期、秋田藩家老であった渋江政光は遺訓で、「山は国の宝なり。然れども伐り尽くす時は用に立たず。尽さざる以前に備えを立つるべし。山の衰えは則ち国の衰えなり」と記しています。また、岡山藩に仕えた儒学者の熊沢蕃山はそこに住まわれる八百万の神を持ち出し、「山川は国の本なり」とも説いていました。大陸のへりに近く、温暖で雨も適度に降り、もともとは人が手を加えなくてもいずれば森林として成立するであろう非常に恵まれた環境であることも幸いし、長いスパンで見れば、森林は回復していったのです。戦後に例をとれば、国策と

して、あるいは国民的運動として造林緑化が叫ばれ、1950年には全国植樹祭が山梨県を第1回として始まりました。そして緑化標語募集もこの年から続けられています。ちなみに1950年の緑化標語は「緑の山から平和の光」、翌年は「緑の大地に伸び行く日本」。いずれも社会情勢や時代を反映した、戦後すぐの匂いを感じられる標語ですね。そしてこの年には森林法が制定されています。その後毎年30〜40万ヘクタールの人工林造成が20年近く続けられ、この先人たちの努力のおかげでわが国では現在森林面積の40%を超える1000万ヘクタール以上の人工林が成立しています。そしてこの戦後植栽の人工林は収穫して販売するにまだ時期尚早で、価格面や納期において外材に対抗できない現状であり、そのため皆伐(まとまった面積での収穫)が行われず、従って経済林(用材の販売を目的とした森林)のための植林は最近ほとんど行われていません。話題になるのは、東日本大

震災で被害を受けた海岸防除林の再生のための植林や、2013年の平成の大遷宮では40トンも使われたという出雲大社の檜皮採取用ヒノキ林造成などです。九州では、中国市場向けのスギ用材生産のための皆伐が行われているようですが、二ホンジカの食害も懸念され、造林保育の費用もままならないため、新たな植栽をためらう山主も多いようです。今回2015年最初の森林塾では、伊那市横山にあったスキー場のはずれ、寺社平というところの森林の、間伐で生じたギャップにヒノキを植えました。150本用意した3年生苗が少し余りましたので、6人で、120本ほど、お昼までの約2時間の植栽でした。プロが行えば1日に200本以上は植えるそうですので、プロの半分程度の仕事でしょうか。恒例の



平地での植栽は、結構腰にきまず



島崎先生も顔を出してくださいました



受け口の斜め切り、角度が少し甘い？

の戦後植栽の人工林は収穫して販売するにまだ時期尚早で、価格面や納期において外材に対抗できない現状であり、そのため皆伐(まとまった面積での収穫)が行われず、従って経済林(用材の販売を目的とした森林)のための植林は最近ほとんど行われていません。話題になるのは、東日本大



いつものトーテムポール作り(ではない)

手前味噌のとてもおいしい
ト汁での昼食後は、昨年
の植栽場所、野底山林の活
着具合を見たあと、森林塾
ご用達、山仕事の道具類を
扱う伊那市のミスホ鋼機さ
んの大売出しを覗いてみま
した。面白い物はしなかつた
のですが、景品だけは貰っ
て来るちゃっかりさです。

二日目は早速チェーン
ソーを使つての伐木造材。
鳩吹公園周辺がサイクリイ
ベントで喧しいので、早々
に現場へ。初体験の方もい
ましたが、まず危なげなく
練習しようです。一年間



きれいな受け口ができました

地上 3m で「はい、ポーズ!!」



使用後の手入れと目立て、これ肝心



照準線を使って受け口の方向確認



こちら小屋根横で受け口作りの練習

チェーンソーという工
エンジンで回っている鋸
(のこぎり)というのが皆
さんの持たれるメジで
はないかと思えます。
ソー(SAW:のこぎり)
ですからね。でもこのイ
メジが時として上手な
伐倒を邪魔することにな
ります。

バーを小刻みに前後に
動かす、バーを細かく
ピッチング(縦方向に上

げ下げ)、などの動作をする
方を見かけます。のこぎりな
ら当然ギコギコとやらない
と切れませんが、チェー
ソーは鋸というより鉋(かん
な)に近い刃物で、鉋を引く
作業はエンジンが回って代
行してくれています。です
からどちらかというとチェ
ン・プレーナーあるいはエ
ンジン・プレーナーという
べき機械なんです。ソ
ーチェーンは上刃と横

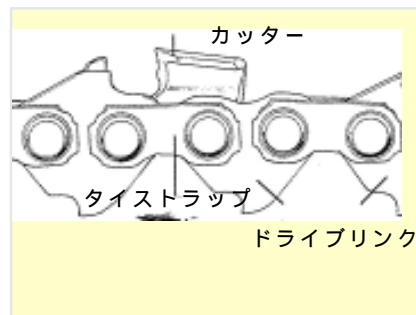
かけて、徐々にチェー
ンソースキルをあげていき
ましょう。時々はテキス
トを引っ張り出して眺め
てみてください。チェ
ンソーの感触をきつと思
い出しますから。

『ソーなんだけどソーでない!!』

専門コース第1回開催報告

通年コース第1・2回
4月24・25日(金・土)
植林・伐木造材
参加者/有賀さん、小口さ
ん、小池さん、洪川さん、都
筑さん
スタッフ/和泉、早川

ラップの三つの部品で成り
立っています。木を切ると
きはカッティングポイント
にカッターの前面部分、い
わゆる上刃、横刃の刃の部
分のみを当てるという意識
で木に当てればカッターが
勝手に切っていくくれる
わけです。こじてタイスト



ラップのリベットを当てた
り、ひどいときにはバーを当
てたりしたら切れません。
ですので切っているとき
はしっかりとチェーンソーを
ホールドして、絶対にぐらぐ
らさせない、押し付けない、
切った分だけ前進させる(刃
を沈める)。フルスロットル
にして、その回転をキープで
きているかを音で確認しな
がらそつと当てれば、仕事は
チェーンソーがみんなやっ
てくれるはず。です。

専門コース第1回開催
5月8・9日(金・土)
参加者/佐藤さん、榎本さ
ん、松崎さん、三田さん
スタッフ/川島、和泉、早川

次回以降の予定
通年コース第3・4回
5月22・23日(金・土)
樹木分類・測量
金曜日は樹木分類です。樹

このふたつを繋ぐタイスト
刃がついたカッター、バー
のレール溝を走るためのド
ライブリンク(足)、そして

2014年の秋の集中
コースでお世話になりました
た堀内潔也と申します。早川
さん、川島さんの座学、実技、
そして今まで積上げてこら
れた山仕事の知識や知恵、
データなど、とても参考にな
りました。ありがとうございました。
山仕事からだいぶ離
れていたのですが、正確に感覚を
取り戻すにも役立ちました。
現在の仕事は模索中ではあ
りますが、出来るだけ低価格

リレー通信



『時代』
堀内 潔也

木の葉や花、樹形などの特徴
からその樹種名を調べます。
いわゆる検索という作業。
そして土曜日は測量・製
図です。コンパスを使って測
量し、手書き図面を作りま
す。鉛筆またはシャーペン
シル、電卓、あればスケール、
分度器など。8時20分鳩吹集
会所集合。

通年コース第5・6回
6月5・6日(金・土)
測樹・刈払機安全衛生教育
5日(金)は鳩吹集会所、6
日(土)は箕輪町のKOA本
社集合。筆記用具、電卓



炭焼き後に(10年前)

を楽し
樂に山
あり、気
近くに
中腹の
もその
の巨木
のブナ
0年位
500
400
か。推定

な家造りをメインにしているかと考えています。
私は、東京都府中市の生まれです。13年前に長野県に来ました。建築の学校を卒業し、設計士になるか、大工になるか悩んでいました。当時、間伐や下草刈のボランティアや環境問題を考える団体に顔をだしていました。(幼稚園や小学生の頃、下草刈や植樹のボランティアに参加した事もあり、山仕事に親しみがあり、その環境問題から考えてみようと思ったような気がします。)どのように出会ったかは忘れてしまいました。そんな付き合い合の中から、島崎先生の『山造り承ります』を読みました。当時は、施業方法を解説するところまで行き着けず、山が抱えている問題だけは分かりましたが、ではどうしたら良い方向に進めていくのかの、具体的な方向が分からず悶々としていたような気がします。大工になるか、

設計士になるかも決められず、問題意識を持った山造りの方向性も分からず、どうしようかと思っていた矢先、長野県に山を持つていて、長野県でも仕事をしている、建築会社の方に会い、決断はできないが山に行こうと思いい長野県に来ました。大町市の高瀬ダムの際の山が私の長野ライフのスタートになりました。
当時出会った会社の社長は、ちょっと大丈夫かなと思っっていました。お持ちの山はすばらしく、東京ドーム80個分ということでした。鎌ノ峰という山頂の一角です。高瀬川をわたり、車一台は通れる林道がありました。入口付近は唐松の人工林が目立ちます。リョウブ、ウリハダカエデ、クロモジ、ダンコウバイなどもあったのを覚えています。山の中腹には、ヒノキの人工林、ホウノキの森もあり遷移が進んだ?ところもあるのでしょうか。推定



丹呉さんの仕事(私も図面を書いた)

むことが出来たと思います。もつと上に登ると、巨木の森と名づけた所があり、ツガやヒノキの巨木があったと思います。その辺りから、ブナも増えていくそんな山でした。中腹に『名主の小屋』と名づけられた、2坪ほどのプレハブ小屋を基本にして、そこからまわりに柱を建て、火焚き場、炊事場を増築していった、述べ床で6坪くらいの山小屋があり、そこが私の最初の家になりました。電機、水道、ガスのない生活ができる、人生で一度は経験しておきたいと思い、ここで生活、仕事をしていこうと決めました。
平日は、大町市の工務店で働き、土日は山でツリーハウス・山小屋作り、炭焼きなどをする日々を1年間。その後、山を下り町に住み、工務店で働き、たまに山で働いた。その生活が一段落した後、



こうあ木工舎での仕事

設計事務所に通りました。設計事務所勤務のときに丹呉明泰さんと、山辺豊彦さんが講師をされている大工塾に参加しました。木構造を分かりやすく、また伝統的な大工技術を一つ一つ実験をし、構造計算に照らし合わせ、構造計算を出来るようにした第一人者の方々です。島崎先生も講師を何度かやられていたと聞きました。技術者としての基礎を教わったとても大切な方々です。
大工塾の皆さんに出会い、木工の事が何も分からないと感じ、次に建具屋に勤める事になりました。ここではただただ下積みです。最初は沢山ご迷惑をお掛けしたと思えますが、何とか、建具技能士2級(手加工)を、2級ではありますがトップの成績をあげることができました。木工の基礎をここで学ばせていただきました。そして、まだまだつづきます...
こうあ木工舎さんにお世話になることになりました。こうあ木工舎さんは、長野



こうあ木工舎での仕事(組子)

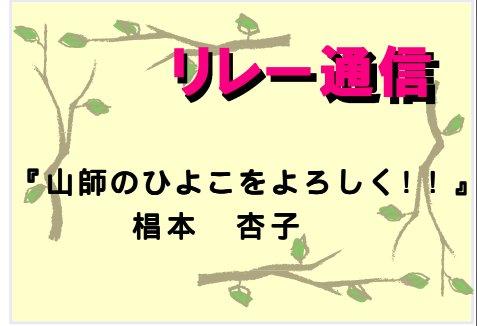
県、伊那の木材中心とした家具・建具を作る木工所です。KOAさんの子会社でもありません。こうあ木工舎さんを知ったのは、大工塾のHPのリンクにKOA森林塾があり、学生時代から気になっていたので、一度森林塾に行こうと。色々調べていたところ、こうあ木工舎なるものがあるが見つけた。即座にこうあ木工舎代表の中村さんに連絡を取り、お会いすることに。あれやこれやと言っている間に、一緒に働かせて頂けることになりました。
こうあ木工舎の中村さん、高松さんの人柄、作る物にひかれました。
高松さんは、70歳をこえています。15歳から建具を作っていて、細かく綺麗な組子(一般的には障子、欄間、書院の建具などでしょうか)がとても見事で、作るのも早い!!人柄も素敵で、近くにいるだけで癒されます!!中村さんは、とても繊細で、家具、鉋の師匠です。鉋に少し、本

当に少しですが自信が持てたのも、中村さんのおかげです。ダイニングテーブルを一人で鉋をかけた時の喜びは、一生忘れないと思います。また、中村さんが設計した家具が良かったです。自然の木を、特に木の外側の部分を、節や割れ、自然の風合いを残して、木なりと言うのでしょうか。私の木工の方向性にも出会った気がします。私が職人としてスタートを切れたのは、こうあ木工舎のみならず、皆さんのおかげだと思っています。現在は、妻の実家のある安曇野市穂高で働いています。
木工、家造りも大切ですが、家族や友達が近くにいる、田んぼや畑をやる生活も私には大切で、有機無農薬での米作りが、4年目になります。米作りは、長野県にきて13年目になります。ずつと続けてきました。現在は4畝だけですが、この面積をつづけていければと思っています。そんなこんなで色々手を出しちゃっています。私にとつて実際にやってみて、実感する。そして想像が付き、実際の生活の推測が立つ。私にとつてとても大切で、それを元に仕事をする事が、自分にも自信が付き、精神的にも安定した状態がつつづける気がします。

やりたいことが一杯あります。なかなか全ては出来ませんが、出会った方々と切磋琢磨しながら、食違いながらも、お互いを認め合い、諦めず一緒に頑張っていきたいです。

くだらだらと書いてしまい申し訳ありません。なんとなく K O A 森林塾には縁を感じていたので、つらつらと長野ライフの経緯を書いてしまいました。(K O A さんの東京の支店がある所のすぐ傍に幼少のころ住んでいました、まったく関係ありませんが...)『山造り承ります』が私の人生になんらかの影響を与えてくれたと思います。一つの問題を軸にし、そこから得た縁を大切にしながら、私が考えられる最善を尽くしていきたいと思えます。

低価格な家造りとは、大工、職人の技術の積重ね。昔から受継がれた技術を検証した伝統的な技術の積重ね。林業家や設計士のためまぬ研鑽。哲学者や農家、農的生活を送られている方々の積重ね。そんな歴史や伝統の積重ねから最良だと考えられる価格帯で、できるだけ安い価格を目指すという意味です。そして、金額は暮らしに多大な影響を与ええるので、できるだけ安くしたいと思っています。



やっと寒い冬を越えたかと思えば、あつという間に春を通り越し汗ばむような立夏を迎えました。じりじりと太陽の照る日が続く、あの凍えた冬がなんだか恋しく感じます。

私は昨年より、伊那市の林業事業体「山造り舎」にお世話になっていて、根本杏子と申します。この4月でやっと社会人2年生となりました。高校、大学と林学をかじり、さらに現場で実際に仕事をしてみたいと思い、この職を選びました。仕事として林業

という職を通して過ごした一年間、まず一番に感じたことは季節です。普段生活している中で季節の移ろいは感じていたものの、一年中現場へ入り作業をしていく中で山の植物が季節に応じて芽吹き、花が咲き、実がなり、紅葉し、落葉し、冬を迎える、そんな当たり前のことを仕事をしながら見ることに、またそれに伴う景観や気候の変化を肌で感じることは、敏感に四季の変化をとらえることができ、とても新鮮でした。そして最近一番驚いたことは、木々の生命力の強さです。先日、昨年伐採し積んであったカラマツが芽吹いているのを見つけました。桜に至っては、なんと花まで咲いていました。山林の手入れ不足がピクアップされることが多い昨今、私自身の中では山は人が手を加えなければいけない存在、弱弱しい存在、と言いつつ勝手なイメージができていたようで、樹木の



ながら驚きを感じました。そんないろいろの発見のある毎日ですが、自分の勉強不足に嘆く毎日でもあり、まだまだ頑張らなければならぬなと感じていま

す。さて、遅くなりましたが。私の苗字「梶本」は皆さんに読んでいただけたでしょうか?この苗字は読んでいただけのほうが珍しいのですが、これで「スギモト」と読みます。この「梶」という字は「杉」の旧字らしく、私の実家がある木曾町開田高原ではスギがつく苗字の人はこの「梶」が使われるかは不明です。

改めまして私、梶本杏子(すぎもと きょうこ)と申します。出身は前述したとおり、木曾町開田高原で、小さい頃から祖父について山で山菜採りやキノコ採りをしたり、ランドセルを背負いながら川に入って魚捕りをして遊んでいました。そのため小さい頃から山には親しみがあり、高校は木曾谷にある木曾青峰高校(元 木曾山林高校)の森林環境科へ進学しました。といっても初めは、林業に興味があつて進学したのではなく、青峰高校で参加することができる森林に関する海外のボランティア研修に興味があつてのことでした。

ですが在学中、林業に関する勉強をするうち、日本の林業って問題も多そうだけど面白いなあ、と思うようになりました。特に私にとって林業に携わりたいと考えるようになったきっかけは、木曾のとある林業の名人にお会いできたことでした。その方は、木曾の山に御料林があつた頃、その山にあこがれを持ち、自分も御料林のような山を作りたいたいと一代でヒノキの植林から枝打ち、間伐などの手入れを熱心に行われ、自分で植林した木でヒノキ御殿を作った方でした。私はその方の「とにかく山が好き」というまっすぐな姿勢が印象的でしたが、なんといつてもその方の手入れされた光が程良く入り、木々がのびのびと育っている山林に涙が出るほど感動したことを今でも鮮明に覚えています。こんな素晴らしい山林を作ることができれば、これが私業をやってみたい、これが私が日本林業に興味を強く持ったはじめの出来事でした。

と、いって実際に林業の現場に立つてみると、果たしてどんな山が良いのか、自分からなくなりました。密な年輪の良い材が収穫できる山が良いのか、大径材が採れる山が良いのか、多様な広葉樹が生息する山が良いのか、などなど。まだ分からないことばかり、山という非常にスパンの長いものを相手にすることは、答えがすぐに見えないことでもあり、何とも難しいものと思えますが今後皆さんと一緒に勉強させていただきます。よろしくお願ひします。

ものと思えますが今後皆さんと一緒に勉強させていただきます。よろしくお願ひします。

おわりに
K O A 森林塾が始まりました。22年目になる今年も、それぞれ数名方が通年コースと専門コースに来てくださいました。
開講時から、この森林塾のテーマは手遅れになりつつある人工林の再生です。そのための森林調査(樹木分類・測量・測樹)とその結果をもとにした間伐が実践の中心になります。
八十八夜も過ぎて、お田植えもそろそろ始まり、これぞ伊那谷の初夏、ということも気持ちのよい季節、山笑う季節が始まります。一緒に楽しみながら勉強しましょう。
途中参加でも問題ありませんので、どうしようか迷われている方、これからでもご参加いかがですか。
5、6月の森林調査、7月の間伐と佳境に入ります。

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。
TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994
E-mail: ki-hayakawa@koanet.co.jp
sh-sakano@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062(開催日)
URL http://www.koanet.co.jp